

## 臨床部門

## 教育の臨床心理学の動向

飯長喜一郎

(お茶の水女子大学)

本稿の目的は、第1に日本教育心理学会における臨床分野の研究動向を展望することである。しかし、臨床心理学は日本教育心理学会以外での動きが重要な分野である。そのため、いきおい他学会の動きにスペースを割く必要が出て来る。また、研究以外の部分での動きが近年非常に大きくなっているため、それらの動きをまとめることも必須となって来ている。特に「臨床心理士」資格の問題は、今後、研究の動向をも左右する問題であると思われるので、ある程度のスペースを割きたい。また、学会の動きを見るとき、個々の論文よりもどちらかと言えばシンポジウムを重視することにする。ひとつには、シンポジウムは研究者の現在の関心をよく反映すると思われるからであり、いまひとつには、教育心理学会での臨床部門の研究発表は散発的であるとの印象を拭えないからである。以上のことを断ったうえで、本論に入りたい。

日本の臨床心理学にとってこの1、2年は、時代の区切りとなるかもしれない。その原因は「臨床心理士」の資格認定協会の発足と、大学の学部や大学院におけるカウンセラー養成コースの出現である。いずれも臨床心理学の専門家たちが長年希望し、準備して来た事柄である。

## 1 「臨床心理士」の発足

1988年3月に「日本臨床心理士資格認定協会」が設立され、9月から資格認定申請の受付が始まった。1988年11月25日付の日本心理臨床学会のニュースレターによれば申請用紙の発行部数は2,800部で、1989年2月末までに申請者は1,000名を越える見通しという。また、認定協会の中心である日本心理臨床学会の会員数は、短期間に急激に増加し、1988年6月末日で3,186名に達し、その後も増え続けている。日本心理学会、日本教育心理学会につぐ数である。また、日本のあちらこちらの大学、研究機関、心理臨床現場には、研修証明書や職歴証明書の記入依頼が数多く舞い込んでいる。

我国においては過去も現在も、国によって認定された心理士の資格は存在しない。存在するのは各種団体による認定資格である。

例えば、「社団法人：日本産業カウンセラー協会」は「産業カウンセラー2級」および「1級」を設定し、その資格認定のための講座と試験を実施している。また、全日本カウンセリング協議会も独自の資格を設定している。

学会による資格としては、日本カウンセリング学会(旧日本相談学会)によるものが1986年5月に制定され、1988年3月に第1回の認定業務が始まっている。ちなみに、日本カウンセリング学会認定カウンセラーの認定資格の基本的条件は、以下の3点である。

- ① 日本国に引き続き5年以上居住していること。
- ② 同学会に正会員、名誉会員として引き続き7年以上在会していること。
- ③ 相談の学識もしくは技能についての研究論文、事例(症例)報告、もしくは実践記録等を有すること。

なお、同学会の入会には、会員2名の推薦が必要とされているが、学歴については特に記載されていない。そして資格認定の申請書のほかに、学術論文等一覧、カウンセリングの実践一覧、技能研修一覧が必要とされている。

「臨床心理士」の資格認定については、今少し制限的な条件が課せられている。

例えば、学歴と臨床経験については、心理学を専攻する大学院の修士課程(または博士過程前期)を修了した後、1年以上の心理臨床経験を、基本としている。学部卒業生についても4年の臨床経験を加えれば可としているが、一応その適用は「当分の間」と区切っている。また、8年間は「経過規約」を設定し、取得を容易にしている。そして、心理臨床経験と見なされる機関・施設や、日数のカウント方法を規定する一方、申請書のほかに、学歴証明書、履修単位証明書、職歴証明書、業務内容証明書、研修証明書、スーパービジョン修了書、事例報告等を要求している。かなりの厳密性を追及しようとしているかに見える。

しかし、問題は残っている。それは、従来からの疑問に日本心理臨床学会(認定業務は日本臨床心理士資格認定協会が行い、同協会には11の学会が参加しているが、

その中心は日本心理臨床学会である)が十分答えていないことである。

疑問の中心は、心理臨床家の専門性をめぐってであり、はたまた、日本の心理臨床業務の現状、特に有効性と限界ないしは問題点といったところであろう。これらの問題は、20数年前から日本臨床心理学会などで取り上げられて来たものであり、今に始まったものではない。心理臨床業務への疑問ゆえに、臨床心理士の資格制定が遅れたとも言えよう。

ここで長年の経緯を述べるゆとりはないが、近年でも、1987年5月の臨床心理学会と心理臨床学会の合同シンポジウム「臨床現場から専門性を考える」を待つまでもなく、例えば、臨床心理学会編集の『心理治療を問う』(1985)では「面接構造の欺瞞性」「治療という名の支配と管理」などの章題で、疑問が公にされている。しかし、数々の疑問に対して、暫定的にでも心理臨床学会が回答しているとは余り思えない現状なのではないか。

また、心理臨床学会は臨床心理学会が申し込んでいた合同シンポジウム開催に数年にわたって応じず、応じたと思ったら、議論を十分に吟味せず、資格認定協会設立になだれ込んだ感がある。

ちなみに、『臨床心理学研究』誌では、早速、同シンポジウムについて報告が行われ(越智, 1987)、感想が掲載された(亀口, 1987, 根本, 1987)他、第25巻3号では『資格問題』特集(1988)を組んだのに対して、『心理臨床学研究』誌では「一般会務報告」で会計決算報告と「……種々論陣がはられ、活発な討論がなされ盛會裡に終了した」との一文が載ったのみである。越智浩二郎は上記の報告の結び近くで次のように述べている。「……かたくなに自分の立場に固執しないで、論敵にも十分こちらの変容可能性を開いて向かいあおうとする姿勢があらこちらで伺えたことはたいへん嬉しいことでした。こういう姿勢が維持されるかぎり、最初に述べた、自分の中の否定的部分を否認し自分自身がダメになってゆく危険は遠ざけられるでしょうし、今の自分の立場性を、よりしなやかに強く持つことが出来るようになるでしょう。」(越智, 1987, p. 49)

このような期待にもかかわらず、1987年11月の心理臨床学会第6回大会ではすでに、上記のような問題を正面から取り上げようとする姿勢が感じられなかった。資格認定協会設立の方向が打ち出された以上、原則的な問題を論議する余地はない。それが現実的なやり方かもしれない。しかし、設立当初からこのような態度では、『心理臨床学研究』誌における村瀬孝雄の「今後、『資格』→カリキュラム→試験……といった具合に、形式的表面的な知識だけが重要視されるように進んでいくとしたら

由々しいことであり、万一にも『資格』がそのようなものに墮するならば、そんな『資格』などないほうがずっと良いかもしれない」(村瀬, 1988, p. 3)というコメントが、現実味を帯びて来ないとも限らない。そうならないためにも『臨床心理士になるために』(日本臨床心理士資格認定協会監修, 1988)のそこここに書かれている、数々の自制自戒の精神を現実化する努力を望みたいし、点検し続けたい。

また、従来から指摘されているように、臨床心理学の業務内容や果たしている役割といった現状の把握、ミニマム・エッセンシャルズの検討をさらに進める必要がある。また、日本における心理療法の効果の大規模な実証的研究を鋭意進めないと、標榜していることと実際の距離がどんどん離れていってしまう危険性がある。ちなみに遊佐安一郎は、産業心理臨床についてではあるが、「アメリカでは心理療法を(産業界に)広めるために、実証的なデータを提供する努力を重ねた。日本でも実証的なデータを提供しないと信用されないのではないか」と発言している。(遊佐, 1988)

科学的研究はもちろん必要であるが、心理療法ないし心理臨床的サービスの受け手からの声を拾う努力も怠ってはならないであろう。例えば、1988年2月の新聞投稿をきっかけに開催されたティーチ・イン「子どもの健康診断」(朝日新聞, 1988年9月11日付)など市民の声を聞く試みに、積極的に参加していくことも、大事ではないだろうか。

## 2 カウンセラー養成コースの発足

第2次ベビーブームが過ぎつつあり子どもの数が減少して来たために、教員の採用数が減ってきたことを受けて、全国の教員養成大学・学部では新しい課程を設置する動きが目立って来た。京都教育大学、北海道教育大学、香川大学などでは1988年度から総合科学課程を新設し、富山大学は情報教育課程を設置した。静岡大学も総合教育課程を1989年度から設置する予定である。

このようないわゆる「ゼロ免課程」の中にカウンセラーの養成コースを含める動きが現実化して来た。典型的なものとしては、埼玉大学の社会教育総合課程がある。同課程には「社会教育コース(社会計画・地方文化・スポーツ医化学)」と並んで「カウンセラー養成コース(心理カウンセリング、福祉カウンセリング)」が設けられている。「心理カウンセリング」は当然、臨床心理士の資格をにらんだものであろう。また、横浜国立大学では生涯教育課程の中にカウンセリング専攻を、東京学芸大学では人間科学課程の中に心理臨床専攻をそれぞれ設置している。これらも同様の考えによるものであろう。

が、前記のように、本来、「臨床心理士」は（現実にならざるかは別にして）基本条件として、修士課程（博士課程前期）修了を考えている。このこととの整合性を図る意味では、大学院教育の整備が必要になって来る。

その大学院教育にも、大きな変化が現れて来た。心理臨床ないしはカウンセリングを研究・教育の正面においた専攻が実現したことである。そのひとつは筑波大学の「生涯開発研究科カウンセリング専攻カウンセリングコース（修士課程）」である。1989年度開設予定。定員は20名で家族・福祉カウンセリング、学校カウンセリング、産業カウンセリングの三分野が設けられている。このコースの大きな特徴は、「夜間大学院」であることである。そのために、現に福祉、教育、産業の現場で仕事をしている人々がカウンセリングの専門教育を受けることが可能になっている。

今ひとつの動きは、京都大学の大学院教育学研究科で、従来の教育学専攻、教育方法学専攻に加えて、臨床教育学専攻が新設されたことである。これに伴って講座増設、講座名変更などが行われ、臨床心理学系教官は教授3名（臨床教育学、臨床心理学、臨床人格心理学）、助教授2名（臨床心理学、臨床人格心理学）、助手1名となった。臨床心理学の専門家を養成するには、やはりこれくらいのスタッフの充実が望まれる。なお「臨床教育学」という概念は大変魅力的であり、今後の発展が望まれるが、いずれ他稿で考えたい。

### 3 日本教育心理学会第30回総会の概要

今年度の総会での『臨床』部門の発表は41題にのぼった。昨年度の16題、一昨年度の30題に比べて大幅な増加と言える。また、シンポジウムについても、臨床、あるいは臨床的な視点が関係して来るとされる企画が多かった。

#### シンポジウム

基調シンポジウム『21世紀へ向けての教育心理学』で肥田野直は「教育現場の切実な問題が研究テーマとして取り上げられず、教育実践に役立つ成果が提供されていないという指摘、すなわち教育心理学の不毛性への批判が繰り返されてきた」（岸田他、1988、S 3）と言い、第6回総会から第15回総会までの発表論文のうち教育実践に直結する論文は5.7%であったなどの結果を引用している。その後15年。事態は変わっているであろうか。さらに、祐宗省三は同シンポジウムで「激動する現代社会の諸相に眼を向け、そこで人間や動物が他者や自然や環境とどのようにつきあって生活しているかを豊かに感じとる必要がある」（岸田他、1988、S 7）と言う。

臨床心理学は、人間がおかれた環境の中でいかに健康

に生きて行くかを追及するというテーマに最も近い学問である。その臨床心理学の現在が、教育から何をつかみ、教育に何を提言出来るか、という問題意識をもって総会に参加してみた。

そのような点で注目すべきシンポジウムはふたつあった。

ひとつは準備委員会企画（公開）の『教育をとりまくストレス——臨床心理学からの問題提起と対策——』（倉戸他、1988）であった。

この標題の魅力的な点は、従来ともするとカウンセリングや教育相談の視点から語られることの多かった教育と臨床心理学との関係を、もっと広い視点からとらえようとする努力が感じられることである。

昨年度のシンポジウム『今、教育相談に何が必要か』の年報報告で、福島脩美は「……（教育相談は）教育の場における生徒、生活の中の子供という独自の対象に対するかかわり方の基本と具体的な方法を含むもので（カウンセリング・マインドでは不満）、現実の必要に応える中で工夫され、創造されるものであろう」（福島、1988、p.11）と述べ、近藤邦夫も「私個人としては、我が学んできた治療の原理に固執するいずれの態度も一応放棄して、学習指導や学級経営や課外活動を主軸とする教師独自の活動の中で、どのような教育活動が子どもの心の成長を促進（あるいは阻害）するかを教育・臨床心理学的な立場から評価し、意味ある教育活動とそれを生み出す諸条件を探っていくことが、現在の実践・研究者に課せられた課題と考えている」（近藤、1988、p.12）と言っている。

いずれも直接的には子どもについて言及したものだが、基本的には教育全体を視野に入れ、臨床心理学が教育に貢献する方向を指摘した発言と見る事が出来るであろう。

シンポジウム『教育をとりまくストレス』は「児童・生徒、さらには教師が直面している深刻なストレスの実態をふまえた問題提起をまずおこない、あわせて対策としてのストレス・マネジメントを模索する」という趣旨のもとに開かれた。

まず氏原寛は長年の個人カウンセリングの経験から、教育の世界での価値観が固定化し過ぎ、紋切り型のセンチメンタリズムが子どもたちのストレスを高め無力感を醸成している、と指摘した。

また、東山紘久は和歌山県での経験より、学校のシステムを生かし教師の教育活動を支援するシステムティックな学校カウンセリング的アプローチを紹介した。

さらに、倉戸ヨシヤは教師の燃え尽き症候群を中心に、教師のストレス・マネジメントを紹介した。昨年のシン

TABLE 1 認知カウンセリングと既存の分野の関係

(市川, 1988)

既存の分野	受 容 す る 点	受 容 し な い 点
行動主義心理学	基礎技能に対するオペラント的手法	実験主義, 条件統制の重視 記 述 主 義
認 知 心 理 学	個人内プロセスの重視 発話プロトコルの重視	実験主義, シミュレーション指向
テ ス ト 理 論	個人差の重視	個人差の数量的把握
教 育 工 学	個別学習の重視 教育方法の積極的開発	教育の機械化指向 表ルートの指導
授 業 研 究	直接的学習指導, 興味・動機づけの重視, 実践主義	一斉授業の一般的方法論 集団パフォーマンスによる評価
臨 床 心 理 学	依頼者への共感的理解 依頼者への全人格的理解 実践研究, ケース研究重視 研究者の経験	生活上・人格上の問題の重視 非指示的療法の重視 間接的学習指導
障 害 児 教 育	直接的学習指導 実践主義, 基礎技能に対する研究者の経験・訓練の重視	対象者の限定

ポジウム『教師の精神的健康』を受けていると見ることも出来よう。

シンポジストはそれぞれ児童・生徒や教師と直接接点のある臨床心理学者であり、話題には具体性があった。しかし、関心の対象はいずれも子どもや教師個人あるいはせいぜい彼らの人間関係に限定され、アプローチとしても従来のカウンセリングの域を出ているようには感じられなかった。

筆者もカウンセリングを実践するひとりであり、個人的なストレスのありようとその克服の道に関心を持っているし、教師のストレスが人間関係的なものを含むことも否定しない。が、それらは以前から長く論じられて来たことであり、新味を感じられなかったというのが実感である。

「教育をとりまくストレス」は極めて多様で多面的である。ストレスサーとしても授業、生徒指導、親との関係に始まって、昇進（管理職試験）、管理されること、画一的な教育内容などなど枚挙に暇がない。教師の日常生活や教育実践に深い関係がありそうな最近の動きに限っても、指導要領の改訂、初任者研修、上級教員の設定などの動きがある。このような中で、臨床心理学は個人のストレス・マネジメントや対人関係にのみ関心を限定して良いものだろうか。現代の教育状況の中で教師がどんなストレスを受けているのか（例えば、人間関係と言っても、教師の人間関係の特色を探るなどの方向もある）を明らかにし、そこに何を提言出来るかを考える必

要があるのではないだろうか。

「教育をとりまくストレス」とは一体何なのかということとを明らかにしないで、「教育をとりまくストレス」を語れるとは到底思えない。現在とりあえず、どこにどのように関わっていくにしても、教育の現状をふまえずに進むのでは教育に対する貢献は極めて限定されたものになろうし、危険なことでさえあろう。昨年のシンポジウム『教師の精神的健康』でせっかく、教師経験の長かった駒野陽子が報告した、現代の学校の病理、教師の重荷と苦悩、女教師の苦悩などを少しでも視野に入れて、語る努力が必要であらう。

ただ、会場では「かえって臨床心理学の限界が見えて来るような印象がある」との指摘がある一方、全く逆に「ええ話しやった。結局は人間関係やなあ」との声も聞かれた。ふたつの感想の断絶は大きい。しかし極めて重要な主題なので、さらに議論が深まることを期待したい。

自主シンポジウム『教師の“力”の功罪——権力・勢力と教育的影響性をめぐって——』（竹下他, 1988）の企画の主旨では、竹下由紀子が前年の総会のシンポジウム『教師の精神的健康』と『今、教育相談に何が必要か』に言及しつつ、社会心理学・人格心理学・臨床心理学などからの話題の提供を提案している。臨床心理学が貢献出来るような分野が、カウンセリングだけでなくこのような所にもあるのではないだろうか。

今ひとつ関心を持ったシンポジウムは、自主シンポジウム『認知カウンセリングの構想をめぐって』（伊東他,

1988)である。

認知カウンセリングとは提唱者の市川伸一によれば、counseling for cognitive problem のことであり、「認知的な問題（主として『何々がわからなくて困っている』という不適応感をもった人）に対する個人的な面接と指導を通して、教授＝学習過程を研究するとともに、個人に応じた教育方法を開発することをめざすというものである。」そして、基礎心理学の研究者が教育にどう貢献出来るか、どうしたら研究者が教育現場に立ち会えるか、という気持ちで、基本的な動機として語られた。

基礎心理学者らしく市川は、認知カウンセリングをTABLE 1のように明快に位置付けた。ここでは、認知カウンセリングは基礎と応用、認知と臨床、理論と実践の接点に存在するとされている。

他の二人の話題提供者および指定討論者から様々な課題や問題点が提出されたが、新しい分野を開拓していこうとする意欲を大いに評価したい。教育の臨床心理学にこの気概が欲しいと痛感した。

また、同シンポジウムにおいて必ずしも中心的な論点ではないが、筆者の関心を引いた発言があった。話題提供者の伊東裕司は「認知過程の研究においては、一般に過程がうまくはたらいっていない場合のデータから有効な情報が引き出される場合が多い」と言う。臨床心理学においては、いずれの学会でも、「うまくいったケース」の発表が殆どである。特に、考察の乏しい事例報告では、どこか自慢話を聞かされるような印象を抱くことがある。いわゆるサクセス・ストーリーのみでなく、失敗からも多くを学びたいものである。

なお、日本行動療学会の第14回大会では、まさしく、シンポジウム『行動療法の失敗例から学ぶべきもの——その背景と臨床への示唆——』（佐々木他、1988）がもたれている。貴重な試みである。

## 口頭発表

臨床心理学は過去も現在も、教育心理学会ではあまり大きな部分を占めていない。臨床心理学では他に有力な学会がいくつも存在するし、医学関係の学会での発表も多い。過去3年の教育心理学年報でも、いきおい教育心理学会以外の動向に、多くの枚数を割いてきた。そのような状況の中で、教育心理学会での『臨床』部門で発表する研究は次の4種類くらいになるであろう。

- ① 臨床心理学的教育実践
- ② 教育事象・教育問題の臨床心理学的研究
- ③ 教育心理学の理論あるいは（研究や実践の）テクニックの臨床心理学への応用
- ④ 臨床心理学の知見による教育の考察

このようなことを意識しながら、口頭発表を見てみた。

なお、限られた時間でシンポジウムにも参加したので、直接見聞したのは『臨床』の第1室（No.901-909、総会発表論文集のページで916-933）と第4室（No.926-932、同966-979）のみであり、他は発表論文集によるものである。

### ① 臨床心理学的教育実践

まず、臨床心理学的教育実践に該当するのは、障害児教育に関する実践研究である。動作対話法または動作訓練法の実践報告がそれにあたる。（遠藤と塚越、1988、塚越と遠藤、1988、窪田、1988、飯嶋、1988、久山、1988、宮崎、1988）地味な努力の積み重ねを感じさせる報告が多かったが、ともすると事実経過の報告に終わっている発表もあり、理論的な積み重ねや、一般化の努力の欲しいものも見受けられた。例えば、坂野（1987）は『教育心理学年報』において、遠藤と塚越（1987）および塚越と遠藤（1987）に対して「……今後、より一般化した動作対話法の確立と、このような方法が何故多様な問題行動の改善に有効であるかの理論的な考察が必要であろう」と期待しているが、残念ながら今年度の発表も、単一事例の通り一遍の報告に終わっている。（遠藤と塚越、1988、塚越と遠藤、1988）

その中で、飯嶋（1988）は『動作訓練を用いた姿勢改善による心の活性化(Ⅲ)』で、昨年度の口頭発表に対する坂野（1987）からの疑問に、答えている。すなわち、「弛緩訓練は以前から行われており、目新しいものではない。リラクセーションと同じではないか」に対しては、「弛緩と共に、適切な緊張をも獲得する訓練である」「ただ単に弛緩するだけでなく、それを積極的に姿勢に統合していくところに特徴がある」と答えている。また、『心の活性化』という言葉の抽象性に対する懸念には、「身体を媒介とする訓練を通して、積極的に身体（姿勢）に働きかける自己の努力感と、思うように動く身体確立感の一致によって、身体だけでない主体的な課題解決に向けての自己の方向性が学習されている。この広がりを表現するために『こころの活性化』という言葉を使った」と言っている。前記のように、事例報告は、ややもすると、単なるサクセス・ストーリーに終わりがちなだけに、このような対話は事例報告を教育心理学会で行うことの意義を感じさせる。

### ② 教育事象・教育問題の臨床心理学的研究

教育事象・教育問題の臨床心理学的研究と言える発表には、次のようなものがある。『留学生の日本社会への適応に関する研究』（佐野と斉藤、1988）は留学生担当教員である佐野の研究である所にひとつの意義がある。研究としてはまだ手探りのなものであるが、足元の教育

問題の分析は貴重である。研究を、留学生の指導と結びつけることが出来るようになるまで発展させることが、大切であろう。もっとも、インタビューを留学生の母国語で行っているので、留学生たちは母国語で日本での学生生活の困難さや悩みを語ることが出来た訳であり、このインタビュー自体がカウンセリング的機能を果たしている可能性がある。研究の実践的発展を期待したい。

『予備校生の心身状態の臨床心理学的研究』（林ほか、1988）も、身近な教育問題との取り組みである。予備校生に、SCT、CMIと「生活態度調査」を春と秋の2回実施して経時的変化などを調べている。秋のほうが身体的自覚症状が増加するのに対して、心理的自覚症状は減少する傾向にあり、受験ストレスが高まるにつれて精神的不安感や不適応感が抑圧されて身体症状に転化するのではないかと考察している。また、「両親の無理解や干渉、意見の対立」で悩んでいる予備校生がCMIで非常に高い神経症的傾向を示し、「生活態度調査」では否定的消極的人生態度を示す、などの、興味ある結果が報告された。さらに、発表会場では、追加資料を元に進学動機（教養派、実益・エンジョイ派、他力派）とCMIとの関係も発表された。

口頭発表者林は予備校の教職員であり、研究内容には日ごろ予備校生と接している経験が生かされていた。結果は言わば常識的な「なるほど」と思わせるレベルのものである。しかし、現代日本の特徴的な教育現象を考察するのに、確かなデータを提供してくれたと言える。ただ、この研究の一部は、昨年は応用心理学会で発表されている。このようなことは、しばしば行われることであるが、やはり、その研究を発表するのに最も適した学会で、一貫して発表してもらいたいものである。

室田による登校拒否の追跡調査（室田、1988）も、現代の深刻な教育問題をめぐる実践的な研究である。登校拒否（不登校）は教育相談機関の相談件数全体のおよそ半数を占め、相談期間が長引くことから、延べ相談時間はさらに高率になっているのが一般である。医師の側からは登校拒否児の予後についてやや悲観的な報告がなされる傾向があるのに対して、教育相談の側から答えるものである。本研究は、発表者自身が担当した登校拒否の事例を、5年後に追跡したものである。その結果、62.5%が社会適応良好、18.8%が社会適応不安定と判定されている。地道な研究であり、結果も教育相談のベテランであれば、ある程度予測がつくものである。しかし、自らの直接経験の集積であるところに確かさがあり、教育相談の側から登校拒否（不登校）や教育に発言していこうとするには、このようなデータは不可欠である。教育相談実践家や研究者の体験および研究の突き合わせや集

大成が望まれる。

『「養護場面エゴグラム」による養護教諭—児童関係の研究』（早川、1988）は、大学で養護教員の養成に携わる教官による教育現場の研究である。P-Fスタディ式の刺激図版に対する児童の反応から、養護教諭に対する児童の認知を交流分析の自我状態の枠組みで捕らえている。今後、養護教諭の実際の活動にどう生かし得るかが注目される。つまり、本研究が意義をもたらし得るひとつの可能な方向は、結果を養護教諭自身にフィードバックしていく事であろうと考える。そのような作業によって養護教諭が自らの実践を振り返る手掛かりが増えるからである。発表会場で報告者が、この方向性に対して、実現上の困難さのみを強調していたのは残念であった。臨床心理学は臨床に始まって臨床（ここでは養護教諭の実践）に戻ることを期待したい。

以上は「②教育事象・教育問題の臨床心理学的研究」と言えそうな発表であった。

それに対して、「③教育心理学の理論あるいは（研究や実践の）テクニックの臨床心理学への応用」や「④臨床心理学の知見による教育の考察」と見なされそうな研究は極めて少なかった。が、『面接質問に関する基礎的研究（Ⅱ）』（田中と玉瀬、1988）は、興味深い研究だった。これは、マイクロカウンセリングにおける訓練対象となる質問技法のうち、「開かれた質問」と「閉ざされた質問」の特性を、返答の音節数、反応時間、反応潜時、反応速度によって検討したものである。臨床家が体験的に知っていることでも、それが客観的指標で確認されることの意義は大きい。臨床家以外の人々に質問の特性を理解してもらう手だてが増えたということ、カウンセリングの訓練での説得力が増大すること、などが考えられる。基礎的な研究は手間がかかるものであるが、工夫によっては、臨床・教育場面（この場合はカウンセリングの訓練）へのヒントが得られるということである。このような基礎的研究は、まだまだ不足しており、発展を期待したい。

#### 事例的研究

次に、子どもへの動作法の適用以外の事例的研究について見てみたい。前記「①臨床心理学的教育実践」でも述べたが、教育心理学会における事例的研究について考える必要がある。

今総会では、発達のテーマを臨床事例から考察したものが散見された。池田らの『登校拒否に関する研究（Ⅰ）——タテ関係からヨコ関係への発達における挫折——』（1988）、石川らの『登校拒否に関する研究（Ⅱ）——女子における治療契機としての女性性受容——』（1988）、川瀬の『登校拒否に関する研究（Ⅲ）——身体症状につい

ての一考察——』(1988)は、それぞれ、サブタイトルについて事例から考察している。この3つの研究は、やや一貫性が感じられた。しかし、散発的とも言える事例発表も多く、発表の目的がはっきりしないものも見られた。発表の目的が、事例そのものの議論であるならば、心理臨床学会などのほうが時間的なゆとりもあり、発表者、聴衆共に得るものが多いのではないだろうか。

また、精神分裂病の臨床心理学的研究が5題(No.912~916)が発表されたが、慢性精神障害者のデイケアの研究(新飯田と千葉, 1988, 千葉と新飯田, 1988, 中谷他, 1988)、アレキシミアの研究(吉井, 1988)などと並んで、いかに有意義な研究であっても、果たして教育心理学会で発表するのが適切かどうか疑問である。もっと議論出来そうな学会があるはずである。

筆者は、教育心理学会での『臨床』部門の発表数の増加を喜ぶものであるが、教育心理学会でこそ発表する意義のある研究発表を望みたい。そして、研究者の姿勢次第で、その可能性が十分あることは、上に見て来たとおりである。

なお、『教育心理学研究』誌の第35巻第4号(1987年12月)より第36巻第3号(1988年9月)までの原著および資料の中には、臨床を直接扱った論文は見当たらない。しかし、以下の4論文は臨床的な関心を内包していると認められる。『教育心理学研究』誌における『臨床』分野のひとつの方向であろう。

- ① 吉田他(1987)『児童・生徒の学習意欲に影響をおよぼす要因と現職教師の認知』
- ② 竹村他(1988)『“いじめ”現象に関わる心理的要因——逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性——』
- ③ 中塚(1988)『障害幼児に対する両親の養育態度因子とその両親間における類似性』
- ④ 田中祐子(1988)『単身赴任の家族に与える影響』

#### 4 他の臨床心理学関係学会の動向

次に、他の心理学会の動向のうち、今日の日本の臨床心理学を考えるヒントとなりそうな、あるいは教育に関係した臨床心理学的研究という意味で注目すべき研究を見てみたい。

##### 日本心理学会

まず、日本心理学会の第52回大会発表論文集を見てみよう。はじめにシンポジウムであるが、臨床心理学と密接に関係したものが4つ開かれている。『夢の機能——臨床心理学と実験心理学の対話——』(鐘他, 1988)は、従来あまり交流することなく平行して行われて来た、臨

床的な夢研究と生理学的な夢研究の対話を図った、意欲的な試みである。その結果どうであったかは、残念ながら筆者は参加していないので、不明である。

『健康心理学のめざすもの』(内山他, 1988a)は、全体医学、トータルヘルスなどに対する関心の深まりを反映したもので、健康心理学会の発足と軌を一にしている。人間の健康を総合的にとらえ、多面的に援助していこうとする健康心理学という概念は、従来の学問の壁を破るだけの力を秘めている。近年盛んになっている、臨床心理学と他の心理学分野との交流(上記の夢に関するシンポジウムもそのひとつであるが)が促進される契機となるだろう。

『登校拒否の行動論的アプローチ』(河合他, 1988)では4氏が話題を提供している。園田順一と小林重雄は、それぞれに登校拒否の発現過程と行動療法的治療法を提出し、曽我は、登校拒否を学校を回避しているのとらえる単純な回避仮説の不十分性を指摘し、学校と家庭の往復過程で発生した回避—回避型葛藤状況における、生体防衛的な受動的回避行動として、位置付けることを提案している。一方、茨木俊夫は、登校拒否を、本人を中心とする「強化随伴システム」ととらえ、諸システムにトータルなインパクトを与えるような行動をシェイピングさせることによって、このトータル・システムそのものを変容させようとするアプローチ(トータル・システム・アプローチ)を提案している。登校拒否現象が個人的問題に還元しきれないことが明らかになって来た今、行動論的アプローチも総合的、システムティックにならざるをえないであろう。企画者の河合伊六も、生徒個人以外に家庭や学校への、多面的な行動論的アプローチを期待しているようである。『エンカウンターグループの展開』(村山他, 1988)は、エンカウンターグループの現状と今後の課題を展望しており、①現代社会におけるエンカウンターグループの意義、②教育への展開、③国際化への展開、④集団、個人療法との関係、⑤セルフヘルプグループとの関連、を取り上げている。エンカウンターグループが日本における活動として位置付きつつある現状を反映した企画である。

個人の口頭発表としては『臨床・障害』部門で90の演題があった。基礎的な心理学の伝統を反映して、障害児・者の基本的な心理機能の分析が目立った。障害児の行動分析が4題、障害児の認知・発達・学習の分析が8題、発達診断の研究が6題、障害者の神経心理学的研究が8題、分裂病者の認知・学習機能の研究が4題、心理検査が10題などとなっている。その他、臨床報告的研究が4題、東洋医学的心理学や原理的な研究、人間学的研究など様々な研究が発表されているのも、日本心理学会



らしいところである。

ただ、心理臨床実践の基礎的研究は意外に少なかった。これに該当すると思われる研究を以下に概観する。

集団心理療法の実証的・基礎的研究が3題。まず、井上他(1988)は、『集団精神療法訓練法としてのプロセスグループの可能性』(小谷他, 1989)を、理論学習と体験のギャップをうめること及び観察自我の成長促進という2点から実践的に検討している。また、巽岩(1988)は、エンカウンター・グループにおいて、ファシリテーターの援助的性質ばかりが強調されて来たことに対して、直面的性質の意義を検証するために、メンバーの成長グループと非成長グループの間に、ファシリテーターに対する認知に関して差があるかどうかを調べた。その結果、初～中期にはHG(自己認知の肯定的変化者)はCS(ファシリテーター認知)が否定的な方向に変化し、LG(自己認知の否定的変化者)はCSが肯定的な方向に変化した。一方、中～終期にはHGはCSが肯定的な方向に、LGは否定的な方向に変化した。そして、これはHGが直面→成長、LGが回避→非成長の体験をしたことを示していると考察されている。

伊藤(1988)は、構成的エンカウンター・グループの参加者のMAS, MPI, Y-G, POI, 自己概念, 他者認知, 魅力度, 満足度について調べている。

そのほか心理臨床の実証的・基礎的研究としては僅かに以下の3題を数えるのみであった。

今野他(1988)は、筋弛緩訓練による自己意識の変化を、身体的レベル、私的レベル、公的レベルなどの面からとらえており、自己像の変容過程には身体レベル→私的レベル→公的レベルという階層性のあることが示唆された。

また、皆川(1988)は、『グロリアと3人のセラピスト』のロジャーズの発言を、視点構造の側面から分析している。その結果、セラピストが、クライアントに視座(述べられた行為の主体は誰であるか)をおき、クライアントの感情・思考・行動に標点(どのような事象が取り上げられているか)を据えるという視点構造が見られたと言う。さらには、「まずClの視座からClの(否定的な)感情・思考・行動に標点を据えた発言がなされ、ついでClの視座からClの(否定的な)感情・思考・行動に標点を据えたTh自身の建設的な印象やTh自身の受容的な考えが表明されており、それによって最初の否定的なClの状態からのシフトがなされることが分かった」などと、報告されている。従来ともすると「共感的理解の表明」とか「受容」とか「明確化」といった決まり文句で語られがちだったカウンセリングにおけるコミュニケーション分析に、興味深い一石を投じたもので

あると言えよう。

門前(1988)は、催眠療法の基礎研究として、間接暗示としての言葉の非定形の影響について集団実験している。

臨床心理学の専攻者は先述のように急激に増えているが、実践的かつ実証的研究はまだまだ少ないのが現状である。臨床的研究は他の臨床関係の学会に譲るとしても、日本心理学会での基礎的研究の充実を期待したい。

#### 日本心理臨床学会

『心理臨床学研究』誌の4巻2号(1987年5月)から6巻1号(1988年10月)までに掲載された、教育問題に関する臨床心理学的研究はわずか1編であった。

弘田他(1988)は『「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究』で、主として中学生の登校拒否児21名の描画を報告している。その結果、登校拒否児全体の特徴はあまり明確にならず、むしろ、臨床像により葛藤群、ひきこもり群、その他の3群に分類し、描画の構成度、充溢度を比較したとき、①葛藤群に、構成度の低いものが目立ったこと、②心気的な訴えがみられるものの描画は、構成度の低いものが多く、充溢度にも欠けたこと、などを報告している。

日本心理臨床学会第7回大会では、大会企画シンポジウムとして『心理臨床における生と死の問題』(詫摩他, 1988)を掲げ、続いて特別講演『禅僧の生死を考える』(古田, 1988)が行われたことが注目された。この企画は同時間に平行して口頭発表などを設けず、講演の後には「臨床心理士」の資格認定に関する説明会を設定してあるという、言わばゴールデンアワーに実施された。20年前と比べて飛躍的に広がった心理臨床的活動、それを反映した会員数の増加と大会における盛んなケース研究、さらには「臨床心理士」資格の発足。ともすると専門的、技術的になり、一人よがりになりがち傾向に対して、学会自らが人間の根本的問題をあえてこの時期に投げ掛けたことは、臨床というもの人間ひとり一人の生き方死に方に直接かわるものだというのを、改めて思い起こさせたという意味で、意義のあることであった。

くしくも、カウンセリング関係32団体の連合体である全日本カウンセリング協議会の創立20周年記念大会における記念講演も『日本人は死をどう考えてきたか』(梅原, 1988)と題したものであった。これは偶然の一致ではなく、「死」というものが心理臨床の根本的なテーマであるとの一致した見解の現れであろう。

シンポジウム関係のうち教育と関連の深い企画がふたつあった。

ひとつは自主シンポジウム『教育相談の特徴と心理臨



床の専門性——地域の公立教育相談機関で我々は何をなしうるのか——』(鶴養他, 1988)で、話題提供者の二人が教育相談あるいは教育相談家のあいまいさに言及していたのが興味深かった。馬殿禮子は教育相談担当者は教育内容を把握していること(教員研修でこれが生きる)と、心理臨床家として力量を持っていることのふたつの必要性に触れた。また、菅野純は自らのあいまい性を逆に武器にするしかないとして、だからこそどこでも特定の立場に束縛されず自由に動ける可能性を語った。そこには、教育相談を一般のカウンセリングルームや病院の心理臨床と区別し、しかも、学校内のスクールカウンセリングとも分けて位置付けようとする努力が伺えた。

自主シンポジウム『学生相談における心理・教育臨床——その特殊性と今日的課題——』(都留他, 1988)も、心理・教育臨床活動の独自性を探求しようとする試みであり、上記のシンポジウムと問題意識を共有していると思われる。

#### 日本カウンセリング学会

教育に関する臨床心理学的研究に最も意欲的な学会誌として、日本カウンセリング学会の『カウンセリング研究』誌をあげることは妥当であろう。同誌の第20巻1号(1987年10月)および2号(1988年3月)を見ても、原著、資料、ケースレポートいずれについても教育心理臨床を研究課題においたものが多い。

まず、長尾(1988)は、自らの臨床事例から、登校拒否の中・高校生(1名は小学生)の母親の性格特性と治療展開との関係を検討している。その結果、

- ① 依存心が強く、社会的に未熟な母親の場合には母子いずれにおいても面接的展開ないし治療的展開が見られた。
- ② それ以外のタイプの母親は、面接的展開が困難であった。
- ③ 合同面接において、母親と子の治療的展開をはかるには、それ以前の母子並行面接での、母親とその面接者、子とその面接者の親密さや信頼関係の確立が重要であることが示された。

そして、面接に対する示唆として以下3点をあげている。

- ① 母親のみの面接における面接目標を、あくまでも子の治療機関への来談をねらうことにするか、あるいは子の問題とは別個に母親自身の性格や態度の変化をねらうことにするか、いずれかに設定すべきである。
- ② 母親以外の家族成員も母親面接や子の治療に対しての協力や同意が必要である。
- ③ 母子並行面接、合同面接においては、面接者同志の

面接に関する円滑な連携をはかること。

サクセスストーリーでなく、まさしく失敗から(も)学んだ貴重な結果である。ただ、面接者の要因(立場、技法、相性や力量など)や、母親と面接者との関係のあり方なども考慮したら、結果がより正確になるだろう。

同じ登校拒否を対象にした研究でも、大日方(1988)は、生徒自身へのアプローチの工夫を報告している。来談者中心のカウンセリングに加えて、セルフコントロールの技法である自己観察や自己評価を実施したものである。国分(1988)は『カウンセリング研究』同号のロジャーズ特集で、ロージェリアンが「パーソナリティの変容を目指す心理療法」と「問題解決を目指すカウンセリング」とを区別しない、と批判している。大日方の研究はこの批判に答えようとするものと見ることが出来る。教育相談が常に問題解決的であるなどということはないが、いつまでも実際の問題解決につながらない相談もまた心もとない。クライアントの様々なニーズ(意識的な要求)やウォンツ(潜在的に願っていること)に応じた面接が出来るようなレパートリーを、持っている必要があろう。

春日(1987)もまた、行動カウンセリング的実践の報告である。小学校5年生に対する社会的行動技能訓練の事例研究であるが、地域の教育相談員と担任教師との連携というところが、これからの教育相談の可能性を示唆している。

その他、大学生を対象にした臨床心理学的研究が2編掲載されている。(山口他, 1988, 林, 1988)

日本カウンセリング学会第21回大会では、実に多彩な研究が発表されている。詳しく紹介することは枚数が許さないで、シンポジウムの大まかな傾向を紹介するにとどめる。シンポジウムは以下の4つであるが、目につくのは、心理臨床と社会との関係に対する意識の高さである。

- ① 『現代社会とカウンセリング』(神保他, 1988)
- ② 『学校カウンセラーのあり方』(原野他, 1988)
- ③ 『電話カウンセリングの理論と展望』(石井他, 1988)
- ④ 『子供病理と学校制度』(田中熊次郎他, 1988)

例えば、『現代社会とカウンセリング』では、渡辺三枝子は「カウンセリングの目標からみて、社会の中の個人にもっと目を向ける必要があるのではないだろうか」と言い、杉本一義は「今日、教育や福祉、医療、企業はもちろん、家庭、社会一般において確かにカウンセリングの需要が高まってきているようである。何故か。そして、そこに求められるカウンセリングとは如何なるものであるか」と問題を提起している。

また、『子供病理と学校制度』では、田中熊次郎は「新

しい学校制度の功罪、今日の学校制度の実質的特色」などを述べた後、現行学校制度の下で、以下のことが必要だと言う。①教育基本法を呼び戻して画一主義・競争主義・管理主義を止める。②文部省などの監督権を縮小し、各教師の自主的な相互研修を重視する。③小・中・高校の全てにカウンセラーの資格をもつ教師を配置する。小林幸正は登校拒否専門学級の経験から、現代の子供病理と学校制度を語り、武田利邦は、定時制教師としての経験から「カウンセリング」によって「登校拒否生徒」を「治して」「学校に復帰させる」という考え方は変だと思うようになった、と投げかけている。

この種の提起は、教育心理学会ではなかなか出会わないものである。過去の教育心理学や臨床心理学の経緯から、「この種の議論は、運動体のすることであって学問になじまない」といった意見が出てくるとは、容易に予想される。しかし、我々が日常の生活の中で抱えている問題に切り込んでいくことが出来なければ（心理学一般はどうであれ）、少なくとも臨床心理学の存在意義は半減してしまうであろう。

## 5 その他の動き

その他にも臨床心理学の分野では、近年様々な動きが見られる。紙数の関係で触れることは出来ないが、教育の心理臨床に関する主な動きのうち目についたものを、（一部、今までの展望と重複するが）以下に箇条書にあげておく。

- 1) 学校教育における相談の独自性を踏まえた議論や提案が、増えて来た。

その現れの例として、

- ① 従来の『月刊生徒指導』誌に加えて『月刊学校教育相談』誌が刊行された。（1987年発行）
- ② 「学級教育相談（学級経営に基盤をおき、学級のすべての成員を対象とする、学級担任が中心となつて行う教育相談）」の提唱。（北島，1988a，北島，1988b，小川，1988）
- 2) メンタルヘルスの展開。（阿部他，1988，内山他，1988b）特に阿部他（1988）は『メンタルヘルス実践体系』として全9巻が「教育編」となっている。
- 3) 養護教諭によるヘルスカウンセリングの広がり。学会としては日本学校保健学会が取り組んでいる。（森田他，1986，小谷，1986，出井他，1989など）

以上、様々な動きを取り上げて来たが、教育や社会の実態を視野に入れ損なった過去のカウンセリングの限界を破ろうとする動きが、そこそこに見えて来ているのは確かである。資格が出来、教育機関が少しずつではあるが整備され、研究発表も増えて来ている。

しかし、教育の心理臨床が、今後、人々に本当に受け入れられて行くかどうかは、心理臨床の受け手自身（児童・生徒、親、教師など）が受け入れるかどうかにかかっている。制度は必要条件であるかもしれないが、決して十分な条件ではないし、ともすると人が人を援助するときに邪魔になることさえあることに、我々は留意していなければならない。

## 引用文献

- 阿部正和他（監修）1988 メンタルヘルス実践体系（教育編全9巻）日本図書センター
- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達の研究 教育心理学研究 35, 3, 231-240
- 遠藤 眞・塚越昌幸 1987 動作対話法による吃音児の治療例 日本教育心理学会第29回総会発表論文集 934-935
- 遠藤 眞・塚越昌幸 1988 動作対話法による難聴児の行動変容 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 920-921
- 福島脩美 1988 今、教育相談に何が必要か 教育心理学年報 27, 11
- 古田紹欽 1988 禅僧の生死を考える 日本心理臨床学会第7回大会発表論文集 39
- 原野広太郎・下司昌一 1988 学校カウンセラーのあり方 日本カウンセリング学会第21回大会発表論文集 19-23
- 早川三雄 1988 「養護場面エゴグラム」による養護教諭一児童関係の研究 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 976-977
- 林 敬子・内野悌司・福田美由紀・篠置昭男 1988 予備校生の心身状態の臨床心理学的研究 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 970-971
- 林 潔 1988 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究 20, 2, 162-169
- 弘田洋二・長屋正男 1988 「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究 心理臨床学研究 5, 2, 43-58
- 巖岩秀章 1988 エンカウンタ・グループにおけるメンバーの自己認知の変化とファシリテーター認知の変化との関連についての一研究 日本心理学会第52回大会発表論文集 356
- 出井美智子・増田 実・見藤隆子（編著）1989 ヘルスカウンセリング 教育医事新聞社（刊行予定）
- 飯嶋正博 1988 動作訓練を用いた姿勢改善による心の活性化（Ⅲ） 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 928-929
- 池田博和・桐山雅子・平岩憲二・辻井正次 1988 登校

- 拒否に関する研究（Ⅰ）ータテ関係からヨコ関係への発達における挫折ー 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 986-987
- 井上直子・小谷英文 1988 集団精神療法訓練としてのプロセスグループの可能性(Ⅱ)ー事例分析による検討ー 日本心理学会第52回大会発表論文集 354
- 石井完一郎・日野宜千・土肥由美子 1988 電話カウンセリングの理論と展望 日本カウンセリング学会第21回大会発表論文集 24-29
- 石川雅健・池田博和・長谷川博一・東浦昇子・加藤礼子 1988 登校拒否に関する研究（Ⅱ）ー女子における治療契機としての女性性受容ー 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 988-989
- 伊藤義美 1988 構成的エンカウンター・グループにおける集中的グループ体験の影響について 日本心理学会第52回大会発表論文集 357
- 伊東裕司・波多野誼余夫・市川伸一・馬場久志・無藤隆 1988 認知カウンセリングの構想をめぐって 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 50-51
- 神保信一・渡辺三枝子・杉本一義 1988 現代社会とカウンセリング 日本カウンセリング学会第21回大会発表論文集 15-18
- 亀口公一 1987 日心臨との合同シンポに参加してⅠ 臨床心理学研究 25, 1, 50-51
- 春日作太郎 1987 高学年児童における社会的行動技能訓練による社会的後退行動の変容ー担任教師と教育相談員の連携ー カウンセリング研究 20, 1, 19-28
- 河合伊六・茨木俊夫・園田順一・小林重雄・曾我昌祺・上里一郎 1988 登校拒否の行動論的アプローチ 日本心理学会第52回大会発表論文集 36-40
- 川瀬正裕 1988 登校拒否に関する研究 Ⅲー身体症状についての一考察ー 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 990-991
- 岸田元美・浅見千鶴子・肥田野直・河合伊六・岡 宏子・坂元 昂・祐宗省三・東 洋・佐々木宏子 1988 21世紀へ向けての教育心理学ー新たな飛躍を求めてー 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 2-8
- 北島貞一（編著） 1988 a 児童の心に迫る学級教育相談（上学年）明治図書
- 北島貞一（編著） 1988 b 児童の心に迫る学級教育相談（下学年）明治図書
- 近藤邦夫 1988 今、教育相談に何が必要か 教育心理学年報, 27, 12
- 今野義孝・星野公夫・大野清志 1988 筋弛緩による自己像の変容について 日本心理学会第52回大会発表論文集 361
- 小谷英文（編） 1986 逃げ場を失くした子どもたち 同文書院
- 小谷英文・井上直子 1989 集団精神療法訓練としてのプロセスグループの可能性(Ⅰ) 集団精神療法 5, 1（掲載予定）
- 窪田文子 1988 動作訓練法による未熟児の発達指導の試み 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 926-927
- 倉戸ヨシヤ・氏原 寛・東山紘久 教育をとりまくストレスー臨床心理学からの問題提起と対策ー 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 27-30
- 久山啓子 1988 動作課題を適用した重度精神遅滞児の事例 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 930-931
- 皆川州正 1988 カウンセリング過程における視点の分析ーセラピストの視点ー 日本心理学会第25回大会発表論文集 362
- 宮崎 昭 1988 障害乳幼児に対する動作訓練法の適用（Ⅲ）日本教育心理学会30回総会発表論文集 932-933
- 門前 進 1988 暗示について(Ⅰ)ー覚醒否定形暗示ー 日本心理学会第52回大会発表論文集 371
- 森田光子・今井洋子・西村紀美代・中村泰子・大戸ヨシ子 1986 日常的に行う相談活動の実際 東山書房
- 村瀬孝雄 1988 臨床心理学にとって基礎学とは何か 心理臨床学研究 5, 2, 1-5
- 村山正治・山口真人・小柳晴生・安部恒久・高松 里・鉦鹿健吉・小谷英文・畠瀬直子 1988 エンカウンター・グループの展開 日本心理学会第52回大会発表論文集 41-46
- 室田洋子 1988 登校拒否の追跡調査について 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 974-975
- 長尾 博 1987 登校拒否を示す青年をもつ母親の性格特性と母子の治療的展開との関連 カウンセリング研究 20, 1, 1-10
- 中塚善次郎 1988 障害幼児に対する両親の養育態度因子とその両親間における類似性 教育心理学研究 36, 2, 152-160
- 中谷勝哉・岡田 章・郭 麗月 1988 慢性分裂病者における眼球運動の特徴 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 938-939
- 根本育代 1987 合同シンポに参加して(Ⅱ) 臨床心理学研究 25, 1, 52-53
- 日本臨床心理学会(編) 1985 心理治療を問う 現代書館
- 日本臨床心理士資格認定協会(監修) 1988 臨床心理士になるために 誠信書房

## 教育心理学年報 第28集

- 小川信夫(編著) 1988 子どもの心をひらく学級教育相談 黎明書房
- 越智浩二郎 1987 日臨心・日心臨合同シンポジウム「臨床現場から専門性を考える」報告 臨床心理学研究 25, 1, 44-49
- 大日方重利 1988 登校拒否生徒のカウンセリングにおける自己観察の効果 カウンセリング研究 20, 2, 146-153
- 坂野雄二 1988 教育臨床の動向と展望 教育心理学年報 27, 100-108
- 佐野秀樹・斎藤耕二 1988 留学生の日本社会への適応に関する研究 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 968-969
- 佐々木雄二・高石昇・野添新一・青木宏之・坂野雄二・茨木俊夫 1988 行動療法の失敗例から学ぶべきもの—その背景と臨床への示唆— 日本行動療法学会第14回大会発表論文集 21-27
- 新飯田房子・千葉浩彦 1988 保健所デイケアにおけるメンバーの行動様式と転帰(1) 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 934-935
- 竹村和久・高木 修 1988 “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究 36, 1, 57-62
- 竹下由紀子・中西信男・市川千秋・狩野素朗・原岡一馬 1988 教師の“力”の功罪—権力・勢力と教育的影響性をめぐって— 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 64-65
- 詫摩武俊・馬場禮子・永井 徹・樋口和彦・村瀬孝雄・大倉 透・星野 命 1988 心理臨床における生と死の問題 日本心理臨床学会第7回大会発表論文集 38
- 田中寛二・玉瀬耕治 1988 面接質問に関する基礎的研究(Ⅱ) 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 972-973
- 田中熊次郎・小林幸正・武田利邦 1988 子供病理と学校制度 日本カウンセリング学会第21回大会発表論文集 30-35
- 田中佑子 1988 単身赴任の家族に与える影響 教育心理学研究 36, 3, 229-237
- 鱈幹一郎・小川捷之・杉本助男・藤原勝紀・氏家 寛・田嶋誠一 1988 夢の機能—臨床心理学と実験心理学の対話— 日本心理学会第52回大会発表論文集 27-30
- 千葉浩彦・新飯田房子 1988 保健所デイケアにおけるメンバーの行動様式と転帰(2) 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 936-937
- 塚越昌幸・遠藤 真 1987 動作対話法による登校拒否児の治療例 日本教育心理学会第29回総会発表論文集 936-937
- 塚越昌幸・遠藤 真 1988 動作対話法による吃音児の治療例(2) 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 922-923
- 都留春夫・平木典子・村山正治・小谷英文・松原達哉・末廣晃二・保坂 亨・佐治守夫 1988 学生相談における心理・教育臨床—その特殊性と今日的課題— 日本心理臨床学会第7回大会発表論文集 42
- 鶴養美昭・徳丸亨・佐藤恵子・馬殿禮子・菅野純 1988 教育相談の特徴と心理臨床の専門性—地域の公立教育相談機関で我々は何をなしているのか— 日本心理臨床学会第7回大会発表論文集 45
- 梅原 猛 1988 日本人は死をどう考えてきたか 全日本カウンセリング協議会創立20周年記念大会講演
- 内山喜久雄・間宮 武・本明 寛・糸魚川直祐・池見酉次郎・滝沢武久・加賀秀夫 1988 a 健康心理学のめざすもの 日本心理学会第52回大会発表論文集 31-35
- 内山喜久雄・筒井末春・上里 一郎(監修) 1988 b 〜メンタルヘルス・シリーズ全25巻 同朋社出版(刊行予定)
- 山口登志子・沢崎真史・鷺見復子・赤塚真理 1988 大学生キャリア・グループに関する研究 カウンセリング研究, 20, 2, 154-161
- 吉田道雄・山下一郎 1987 児童・生徒の学習意欲に影響をおよぼす要因と現職教師の認知 教育心理学研究 35, 4, 309-317
- 吉井健治 1988 アレキシシミアに関する研究—心身症群と非心身症群との比較— 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 948-949
- 遊佐安一郎 1988 ワークショップ「産業心理臨床の可能性を語る」(1988年9月2日)における発言